



企画にあたって

絹川真太郎（国立病院機構福岡病院循環器内科 部長）

臓器移植法改正後四半世紀が経ち、年間100例を超える心臓移植手術が行われるようになり、その累計は1,000例を突破しました。標準的な心不全治療のオプションの1つとして心臓移植は確立しており、2025年には「2025年改訂版心臓移植に関するガイドライン」が上梓されました。これまでに日本の心臓移植医療を築き上げてきた多くの関係者の努力により、心臓移植は大きく発展し、「成熟期」を迎えています。心臓移植医療のメインイベントは、当然ながら移植手術であることは言うまでもありません。しかしながら、心臓移植医療全般にわたってほとんどの場面で循環器内科による心不全診断・治療が適切に行われなければ成立しません。一方、非移植施設の一般の循環器内科医・内科医にとってはいまだ「特別な治療」から脱していません。このような背景のもと、本特集では「心臓移植」を取り上げました。特に、心不全診療に携わるすべての循環器内科医・内科医に向けて、心臓移植医療が心不全の普遍的な治療オプションである点を強調した構成としました。

本特集の冒頭で「2025年改訂版心臓移植に関するガイドライン」のエッセンスを概説いただきました。さらに心臓移植を見据えた心不全診断・治療、心臓移植後の管理など心臓移植医療の全体像をわかりやすくまとめていただきました。また、ドナー不足、次世代を担う移植内科医の教育、社会への啓発など心臓移植を取り巻く複数の課題が残されており、それらについての現況と取り組みをご記載いただきました。これらをガイドラインの執筆陣を中心にご執筆いただきました。本特集が、心不全診療に携わる多くの循環器内科医・内科医の皆様にとって、日常臨床における実践的な一助となることを願ってやみません。